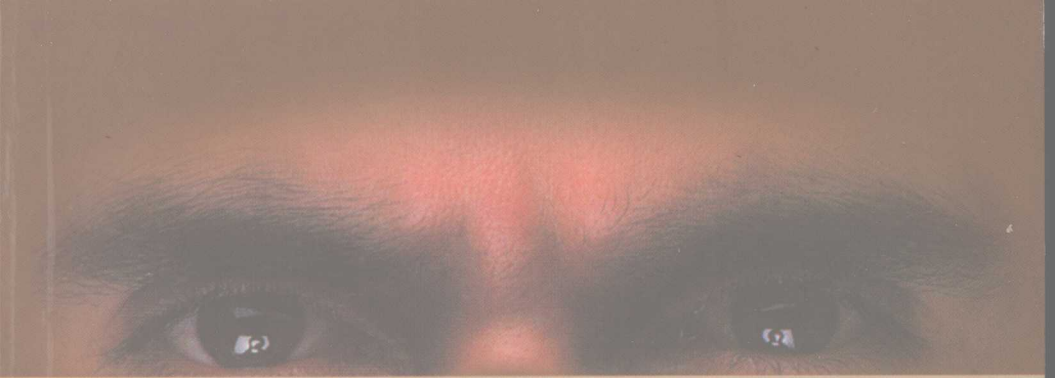




『この事実を……』②

——「南京」難民に仕えた宣教師証言集——

章開沅 編
加藤実 訳



南京大学出版社

『この事実を……』②

——「南京」難民に仕えた宣教師証言集——

章開沅 編
加藤実 訳

南京大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

天理难容: 美国传教士眼中的南京大屠杀: 1937~1938/章开沅编; 加藤实译. —南京: 南京大学出版社, 2005. 5

ISBN 7-305-04456-3

I. 天... II. ①章... ②加... III. 南京大屠杀—史料—日文 IV. K265.606

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2005)第 029617 号

- 书 名 『この事実を……』②
——「南京」難民に仕えた宣教師証言集——
- 编 著 章開沅 編
加藤実 訳
- 出版发行 南京大学出版社
- 社 址 南京市汉口路 22 号 邮编 210093
- 电 话 025-83596923 025-83592317 传真 025-83328362
- 网 址 <http://press.nju.edu.cn>
- 电子邮件 nupress1@public1.ptt.js.cn
sales@press.nju.edu.cn 销售部
- 经 销 全国各地新华书店
- 照 排 南京展望文化发展有限公司
- 印 刷 江苏省通州市印刷总厂有限公司
- 开 本 850×1168 1/32 印张 24.125 字数 704 千
- 版 次 2005 年 5 月第 1 版 2005 年 5 月第 1 次印刷
- 印 数 1—1 500
- ISBN 7-305-04456-3/K·288
- 定 价 58.00 元

* 版权所有, 侵权必究

* 凡购买南大版图书, 如有印装质量问题, 请与所购图书
销售部门联系调换

日本語版まえがき

『天理難容——美国伝教士眼中的南京大屠殺(1937～1938)』が1999年に出版されると、海外でも中国でも大きな反響が起きました。アメリカのシャープ社がすぐに英語版を出すことに決め、東京でもいくつかの出版社が日本語版を出したいと希望されました。けれども、愛徳基金会在熱心にお世話くださり、中国語版を出された南京大学出版社の承諾もいただき、経験を積まれた日本の加藤実先生が翻訳に当たられることに決まりました。

2000年から加藤先生はこの本を訳され、もう三年も費やしておられます。先生は何に取り組まれるにも慎重かつ丁寧で、いつも中国語版と英語版とを対照し、正確に日本語に訳そうと努めておられます。去年の秋に、この訳出に精力を集中させようとほかの働きを辞め、わたしたちの学校のお招きに応じて、欣然と武漢へ共同研究においでになり、華中師範大学中国近代史研究所の同僚たちといつもいっしょに切磋琢磨されて、ついにこの40余万字もの専門書を完訳し原稿とされました。

この本は主として、南京国際安全区委員会の原初資料を題材としたもので、アメリカの宣教師10名の当時の日記や手紙や備忘録などがそれです。このアメリカ人宣教師たちは、いずれもキリスト教の平和主義者で、平和を愛して戦争に反対し、正義を守って邪悪を譴責しました。この人たちは生命の危険を冒

し、寝食を忘れて中国の難民を救援したばかりでなく、中国侵略日本軍の南京におけるさまざまな凶暴行為を、その日その日に一つ一つの事例ごとに記録し、全世界に南京城内の実相をあからさまにし、日本軍国主義者の残虐きわまる面相を天下に公表したのです。加藤先生も敬虔なキリスト教の平和主義者で、加害国の人でありながら、民族的な偏見は少しもありません。南京大虐殺の被害者に深く同情され、日本の軍国主義が中国を侵略した犯罪行為を日本人々に明らかにするのに努めておられます。

先生が、当時の被害者で1984年に生存していた“老百姓”640名もの証言を日本語に訳し、『この事実を……』——「南京大虐殺」生存者証言集——として4年前に出版され、今また西洋の宣教師10名の証言の日本語訳を、『この事実を……』②——「南京」難民に仕えた宣教師証言集——として出版されるのは、より多くの日本の人たちが目覚めて、日本の右翼勢力が軍国主義のためにすべてを覆そうとする逆行にわたしたちと共に反対し、世界の平和と公正を護ろうと闘うのに、力となるに違いありません。

わたしには日本の歴史学界に友人がたくさんいて、その誰もが中国の人民に真摯で友好的な想いを抱いておられます。誰もがみんな生涯にわたって中日友好と学术交流の働きに従事しようと努め、わたしたちといっしょに日本の右翼分子の歴史を歪曲する陰謀に反対していますが、ある方は銃弾つき匿名の手紙による威嚇すら受けておられます。

昨年病で他界された田中正俊教授は、1943年の12月に応召して入隊し、マニラやシンガポールや台湾に従軍されました。占領された地域の人々を自分では傷つけたり侮辱したりはしなかったとしても、侵略戦争の時期に帝国軍隊の一員となってい

たということを、一生涯恥ずかしく感じておられました。ご自身の「戦争体験」を書いて『戦争・科学・人』という書物にし、1937年7月7日盧溝橋事件50周年の記念とされました。「一人の歴史研究者の立場と良識とを以って、あの戦争において自分自身が経験し感じ取ったものを振り返りたい」と言っておられますが、その目指すところは主として平和を守り、戦争を知らないでいる次の世代を教育することです。

先生はその最後の年に、『戦中戦後』という新たな書物を中国語に訳して出版するようわたしたちに委ねられ、臨終に際してもそのことが念頭を去らず、その遺書でもきつと正確な翻訳に努めてほしいと諄々と念押しをしておられます。わたしは羅福惠教授にその翻訳に責任を負っていただくとともに、『天理難容』日本語版の出版を以って、この品性の高尚な日本の歴史学者を記念したいと思います。ですから、加藤実ご夫妻がこの本の翻訳に労苦してくださったのがとりわけ嬉しく、愛徳基金会と南京大学出版社との熱いご援助にも感謝してやまないのです。

1995年にわたしは『南京大屠殺的歴史見証』なる書物の序文に、「われわれが恐怖と犯罪行為に満ち満ちた往事を回想するのは、報復のためでは決してなく、真理を求め正義を伸張するためであり、歴史の経験を汲み取るためでもある。わたしのかつての先生であって亡くなられたベイツ博士の一言を、ここに引用して序文の結びとするのをお許しいただきたい：“地には和やか、人には慈しみ”」と書きました。

これと正しくぴったりなのが、田中先生が『戦争・科学・人』の扉のページにやはり引用されている、太平洋上で戦死した日本の年若い学徒兵の手記にある“きけわだつみのこえ”という詩です。「どうして日本人が死んで、日本人しか悲しまないのか。どうしてよその国の人死んで、よその国の人しか悲しま

ないのか。どうして人は、ともに喜ばなく、ともに悲しめないのか」というのです。この詩にわたしは強く感動したもので、1995年12月13日の東京での南京大虐殺60周年記念の大会で基調講演をしたときに、この言葉を結びとしました。そのときわたしは声が詰まってしまい、日本語に通訳しておられた女史はまぶたが涙であふれ、会場の多くの聴衆ははじめ沈黙のうちに静まり返っていたのが、やがて目が醒めたかのように拍手が長時間鳴り止みませんでした。潮のように寄せては引いていく拍手を耳にしつつ、わたしの強く感じましたのが、中日両国の人々は心が通じていて、わたしたちはみんな末永く親しみ仲良くしたいと願っているのもあって、平和で友好的な状態で自分の国をよくしていき、みんなが幸せな美しい生活をし、アジアの人たちや世界の人々みんながそのように穏やかに相對していくべきだ、ということでした。

けれども、何はともあれ、歴史の真相は覆い隠すことも歪曲することも許すべきでなく、そうして初めて有益な歴史の経験を真に汲み取ることができ、戦争をなくし、平和を護ることができるのです。

これが、わたしの日本の読者に心より願うことなのです!

章開沅

2003年初春於桂子山

日文版序

章开沅

《天理难容——美国传教士眼中的南京大屠杀(1937~1938)》一书在1999年出版后,在海内外引起热烈反响。美国 Sharpe 公司立即决定出英文版,东京有几家出版社愿意出日文版。但是,由于爱德基金会的热心关照,同时又得到已出中文版的南京大学出版社的承诺,终于确定由日本资深学者加藤实先生担任此项翻译工作。

从2000年以来,加藤先生已经花费两年多时间来翻译这本书。他的治学态度非常严谨,经常把中、英文版加以对照,然后力求准确地译成日文。去年秋天,为了集中精力译好此书,他又辞去其他工作,欣然应邀前来我校合作研究,与我们研究所同仁经常在一起切磋商榷,终于将这本40余万字的专著译完并且定稿。

本书的取材,主要是南京安全区国际委员会的原档,包括10位美国传教士当年的日记、书信、备忘录等。这10位美国传教士都是基督教和平主义者,热爱和平,反对战争;主持正义,谴责邪恶。他们不仅出生入死,废寝忘食地救援中国难民,而且还逐日逐事地把侵华日军在南京的各种暴行记录下来,向全世界揭露南京城内的真相,把日本军国主义者的残暴嘴脸公诸天下。加藤先生也是一位虔诚的基督教和平主义者,虽然是加害国的公民,却丝毫没有任何民族偏见。他深深同情南京大屠杀的受害者,并且努力

向日本人民揭露日本军国主义的侵华暴行。

他在1999年已经把640位受害幸存者中文证词结集译成日文出版作为『瞧！这事实……』——「南京大屠杀」幸存者证言集——，现在又把许多西方传教士的证词结集译成日文出版作为『瞧！这事实……』②——为「南京」难民服务的传教士证言集——，这一定有助于更多的日本人民醒悟过来，与我们一起反对日本右翼势力为军国主义翻案的逆流，并且为维护世界的和平与公正而斗争。

我在日本史学界有许多朋友，都对中国人民怀有真挚的友好感情。他们终生都努力从事中日友好与学术交流工作，并且与我们一起反对日本右翼分子歪曲历史的阴谋，有的人甚至受到附有枪弹的匿名信的威吓。

去年病逝的田中正俊教授，曾经在1943年12月应征入伍，并且先后随军到过马尼拉、新加坡和台湾。他自己虽然从未伤害或欺侮过被占领地区的人民，但为在侵略战争期间充当过帝国军队之一员而感到终生羞愧。他把自己亲自感受的“战争经验”写成『战争·科学·人』一书，作为对于1937年7月7日卢沟桥事件50周年的纪念。他说：“我想以一个历史研究者的立场和良知来回顾自己在那场战争中的亲身经历和感受，”而其主要目的则是为了保卫和平，教育那些不了解战争的下一代。

他在生命的最后一年，曾经委托我们把他的新著『战中战后』一书译成中文出版，临终时还念念不忘此事，在遗书中谆谆叮嘱一定要力求翻译精当。我除邀请罗福惠教授负责翻译此书外，亦将《天理难容》日文版一书的出版，作为对于这位品格高尚的日本史学家的纪念。因此，我更加感激加藤实夫妇为翻译此书的辛勤劳作，同时也感谢爱德基金会与南京大学出版社的热心帮助。

早在1995年我就曾经在《南京大屠杀的历史见证》一书序言

中说过：“我们回忆充满恐怖与罪行的往事，决不是为了复仇，而是为了寻求真理与伸张正义，同时也是为了汲取历史经验。请允许我引用我的已故老师贝德士博士的一句话作为序言的结语：‘给全球以和平，给人类以慈悲’。”

与此正好巧合的是，田中先生在『战争・科学・人』的扉页上也引用了当年战死在太平洋上的一个日少年学生兵手记中的一首诗《听：海的声音》。原文是：“为什么日本人的死，只有日本人悲伤？为什么别国人的死，只有别国的人悲伤？为什么人类不能共欢乐、共悲伤？”这首诗深深地感动了我，所以我在1995年12月13日东京纪念南京大屠杀60周年大会上作基调讲演时，就用这几句话作为结语。记得当时我的声音哽咽了，为我充当日语翻译的女士热泪盈眶，台下的众多听众起初是沉默地静坐着，随即仿佛醒悟过来一般地长时间热烈鼓掌。在潮水一般涌来的掌声中，我深深感到中日两国人民的心是相通的，我们都希望永远亲睦相处，在和平友好的环境中把自己的国家建设好，大家都过幸福美好的生活，在亚洲、在全世界人们都应该如此温厚相待。

但是无论如何，历史真相不容掩盖与歪曲，只有这样才能真正汲取有益的历史经验，杜绝战争，维护和平。

这就是我对日本读者的真诚愿望！

2003年初春于桂子山

編集翻訳(中国語版)の経過

章 開 沅

『ラーベ日記』の発見ならびに何カ国語にもよる出版は、疑いもなく「南京大虐殺」研究の重大な進展であり、この歴史的事件にまたもや詳細精確で系統だった実情記録を提供した。しかしわれわれはイエール神学校の図書館に収蔵されている南京安全区国際委員会の保存資料および同委員会メンバーの私的な日記や手紙やメモが、同様にきわめて重要な「南京大虐殺」に関する揺るぎない証拠であることにも、注意すべきである。

わたしは1988年6月に初めて、イエール神学校の特別収蔵室(The Special Collection of Yale Divinity School)の保存資料を利用し、ベイツ文書(Bates Papers)にたくさん「南京大虐殺」に関する原初資料が保存されているのを発見した。1991年にわたしがまた、この特別収蔵室でまるまる八ヶ月仕事したのは、主としてベイツ文書を組織的に研究するのと、その中でも比較的重要な南京安全区国際委員会の原初資料、および一部の委員会メンバーの手紙や日記を、選んでコピーしたり筆記したりすることであった。同時に、ニューヨークの「記念南京大屠殺受難同胞聯合会」(Alliance in Memory of Victims of the Nanking Massacre)の同僚である呉章銓さんにも、同じように一揃いコピーしに来てもらった。1994年から95年の前半に、抗日戦争勝利五十周年を記念するために、わたしは上記の文献を利用して二

冊の書物——『南京大虐殺の歴史的証拠』(湖北人民出版社 1995 年 7 月版)と『南京——1937 年 11 月～1938 年 5 月』(香港三聯書店 1995 年 6 月版)とを執筆し編訳した。この二冊の書物がはじめて、南京安全区国際委員会の原初資料と同会構成員としてのベイツなど外国人の私的文書とを、かなり組織的に利用したことから、内外の多くのメディアが大いに関心を寄せ、争って報道した。わたしの金陵大学の先輩だった台北金禾出版社の責任者郭俊铎とアメリカの南イリノイ大学教授呉天威のお二人が、いずれもかつてベイツ博士に教えを受けたことから、この文献をとりわけ重視された。お二人とわたしとで相談し、その一部分をコロタイプ印刷で出版して、全世界にその本来の様相が見られるようにした。お二人が共同して努力された結果として、主にマーサ・スモーレイが編集した『アメリカ人宣教師による南京大虐殺の目撃証言、1937～1938』(American Missionary Eyewitnesses to the Nanking Massacre, 1937～1938, Edited by Martha Lund Smalley, New Haven, 1997)が、『イエール神学校図書館特別刊行』第 9 期の名で出版され世に問われた。

イエールのこの書は、これまで以上に詳細に、同図書館の収蔵している南京大虐殺に関する保存資料の分布状況を公にした。それを表にすると次のようになる：

Bates, M. S. : 妻と息子への家庭通信(RG10: B1, F7～11)、南京日本大使館との往復書簡と金陵大学創建者会及び田伯烈(Timperley H. J.)との通信(RG10: B4)、抗戦期間の南京関係資料(RG10: B86, B87, B90)、中国政治宗教情勢関係資料(RG10: B102, F861～871)、伝記資料(RG10: B103, F872～873)、極東国際軍事裁判で証言した内容写し(RG10: B126, F1132, 1137)

Ⅲ 『この事実を……』②

Fitch, G. : 書簡(RG11: B9, F202)

Forster, E. : 書簡、収集した文献と写真(RG8: B263～265)

McCallum, J. : 「1937 年冬から 1938 年までの日本軍の南京における凶暴行為の事実を述べた」口述歴史副読本(RG8: B119, B22x)

Maggee, J. : フォスター文書所収の書簡、彼を紹介したフィルム(RG8: B263)

Mills, W. P. : 妻への家信(RG8: B141)

Smythe, L. S. C. : 書簡、『南京地区の戦争災禍、1937 年 12 月から 1938 年 4 月まで』(RG10: B102, F864～869) (RG10: B4, F67) (RG11: B225, F3815)

Vautrin, M. : 日記、書簡、報告(RG8: B206) (RG11: B134, F2698～2700) (RG11: B145, F2870～2881)

Wilson, R. O. : 書簡、報告(RG11: B145, F3874～3493)

Bauer, G. : 南京事件関係記述(RG11: B205, F3849～3493)

Buck, J. L. : (以下同じ) (RG11: B208, F3537～3542)

Caldwell, O. : (RG11: B209, F3547)

Daniels, J. H. : (RG11: B212, F3603～3603)

Garside, B. A. : (RG11: B10, F231～234) (RG11: B136, F2745)

Javis, A. M. : (RG8: B103) (RG11: B139, F2783)

Kirk, F. : (RG11: B138, F2761～2763)

Riggs, Charles and Grace: (RG11: B224, F3787, 3788)

Spicer, E. : (RG11: B142, F2827～2829)

Steward, Albert and Celia: (RG20: B10, F220)

RG8: 中国文献プロジェクトの個人収蔵

RG10: ベイツ文書

RG11: アジア基督教高等教育聯合理事会保存資料

RG20: ステュワード夫婦文書

このほかに、イエール大学のスターリング図書館保存資料部(Manuscripts and Archives, Sterling Library)にはパークストン文書(John Hall Parxton)がまだ保存されている。パークストンはアメリカの外交官で、かつて駐在南京副領事(1925~1929)、駐在南京大使館二等秘書官(1937)と上海総領事館派遣南京大使館員(1938~1942)に任じられていた。

わたしがすでに出版していた二冊の書物とイエール神学校が新たに出版したこの書物とは、主としてベイツ、フィッチ、フォースター、マッカラム、マギー、ミルズ、スマイス、ヴォートウリン、ウィルソンなどの遺した原初文献を利用している。これらの資料と最近出版された『ラーベ日記』とは、いずれも南京安全区国際委員会の外国人グループが、中国侵略日本軍の凶暴なる南京大虐殺の様相を書いたもっとも詳細を尽くした実写記録であって、その公正なること、真実なること、厳密なることはいかなる者も否定しようのないものである。以下にそれを、いくつかの面から説明しよう。

第一は、その真実なることである。

国際委員会の保存資料とされた文書は、早くも当時において発表され利用されていた。もっとも早く世界に南京の日本軍の凶暴行為を暴露したのはアメリカ『ニューヨーク・タイムス』記者のティルマン・ダーディン(Tilman Durdin)で、彼は1937年12月18日から同誌に連続記事を掲載し、そのうち12月22日のものは『アメリカ人宣教師たちの描く南京恐怖統治』(American Missionaries Discribe Nanking Reign of Terror)と題されていた。国民政府教育部次長の王世杰が、1937年12月15日と1938年の1月10日と2月14日の日記に前後して、いずれもベイツが条理立てて陳べた日本軍の焼き、殺し、姦淫し、虜にするなどの、とて

つもなく大きな蛮行に言及していた。後に政府のメディアの伝えるところにより、この事件が広く外界の人たちのよく知るところとなった。当然ながら、影響のより大きかったのが、やはり1938年と1939年に相継いで出版された二冊の書物である。一つは『マンチェスター・ガディアン』記者のティムパレイ(H. J. Timperley 田伯烈が中国名)がロンドンとニューヨークで出版した『戦争は何を意味するか? 日本軍の中国での凶暴な行為』(What War Means, the Japanese Terror in China, Modern Age Books Inc., London, New York, 1938):一つは燕京大学教授の徐淑希が編集し上海で出版した『南京安全区の記録』(Documents of the Nanking Safety Zone, British Kelleg & Walsh Firm, Shanghai, 1939)である。この二冊にはいずれにも国際委員会の重要文書、特に同会が逐次正式にレポートし、番号を付けて444件にまで及んだ、日本軍の南京における凶暴行為事件の事例が収められている。現在、われわれがすでに出版されているこの二冊と『ラーベ日記』とを、イエール大学神学校の図書館に収蔵されている国際委員会の原初文献と対照させるならば、それらの記述が基本的に一致しているのが見出され、とりわけイエール蔵書が目下のところ、保存のもっとも好くもっとも多い、国際委員会保存資料の十全な一揃いであることが解る。

第二は、その完全に整っていることである。

時期の点から言って、ティムパレイ氏と徐氏の両書と『ラーベ日記』とに入っている国際委員会の文書は、1938年の春までなのに、ベイツらの文献に入っている同会の保存資料は1940年までで、前者より二年あまり多い。文献の種類から言って、前者は主として、同会の議長あるいは書記の正式に署名して発した、公文書とその添付書類であり、イエール蔵書には同会の正式公文書のほかに、各難民キャンプが同会に報告した、日本軍の凶暴行為の原事件が記録されていて、これらの原事件が正に同会が

それに依拠して、日本大使館と軍事当局とにその都度すぐさま通報した原初の根拠である。このほかにイエール蔵書には、同会の主要メンバーの日記とプライベートな手紙も収められていて、さらに率直にしかも詳細かつ精確に、日本軍の各種罪行を暴露している。たとえばベイツが1938年1月10日に、転々と回り回らせて送り届けた秘密の書簡、同年4月2日にマギー牧師が、「南京大虐殺虚構論」に反駁してマクキム牧師に送った手紙、同年4月12日にベイツが、ティムパレイの『日本軍の中国での凶暴な行為』なる書物を説明し、背景を書いて友人に送った文書、および同年11月29日にベイツが、日本軍の南京地域で造り出した、戦争による損害に関わる統計数字について友人に送った文書など、これらの文献にはいずれも非常に高い史料価値がある。ベイツは日本軍の大虐殺なる罪行を暴露したほかに、まだ多くの精力を注いで、日本の侵略者が南京地域で野放図に拡張していた毒物貿易を調査研究し、多くの系統だった詳細精確な記述を遺している。このほか、ベイツ文書の中に保存されている、南京の日本軍慰安所(美しくもその名の曰く「第四日支親善館」)のポスターは、上にくっきり「支那美人」なる大きな四文字と、その館の所番地とが表示されていて、ベイツが新聞紙上に発表した批判的な説明が付けてあり、これも中国の慰安婦問題に関わる第一次史料である。

第三は、その客観的なことである。

国際委員会のメンバーの多くは、「南京の古くからの市民」と自称していたものの、彼らは畢竟するところ外国人であって、1941年以前には中立国人士に属していた。ベイツを例に取れば、東方専攻の歴史学者として、中日両国の歴史や文化や人民の、どちらにも深く懇ろな想いを懷いていて、いかなる側の肩を持つわけでもなかった。キリスト教の平和主義者として、ずっと両国人民に仲良くして、経済や文化の交流を強めるよう呼び

かけていた。彼らは戦争に反対したが、いかなる先入観もなく、自分の目で見た大量の事実から、公正な価値判断が出てきたのだった。1938年の4月2日にマギーが、J. C. マクキム牧師に宛てた手紙の中で指摘している：「わたしはあなたがかつて『（ニューヨーク）タイムス』に投書されて、日本軍の虐殺に関する話はフィクションだろう、と言われたのに注目しています。今のこの時点ではあなたはもう、それらが全く確実に疑いないものでしかあり得ないと、分かっておられることでしょう。もしも自分のこの目でこうした事柄を見たのでないなら、わたしもこのような事が現代社会に発生するなどとは、信じられません。これは人に、古代アッシリアの暴虐行為を思い起こさせます。わたしたちはかつて、これほどの恐怖を予想したことがなく、こうした事が始まったときは、わたしたちほんとに恐ろしく震駭させられました」。プライベートな間でのこのようなありのままの表現に、自ずと書いている事の真実で確かなことが表れている。同時に、彼らは日本侵略軍の罪行を暴露しただけでなく、自分の国の政府が日本の中国侵略の誤った政策を、欲しいままにさせたり支持したりしているのを、如実に批判もしている。1938年の11月29日にベイツが、マドラスへ国際会議に参加しに行くので香港を通ったときに、友人に宛てた手紙の中で述べている：「南京市内のアメリカの平和主義者は、その生活も峻厳なものだ。彼らは何日も続けて、百機もの（日本の）爆撃機が群を成して飛んでいくのを目撃しているが、そのあるものはアメリカの装備を積んでいて、しかもほとんど全部がアメリカのガソリンで満杯になっているし；長江では途切れることのない（日本の）軍艦が、アメリカのガソリンで走っているし；道路を走っている何百台もの（日本の）軍用トラックも、通用公司[General Motors]やほかのアメリカのメーカーが製造してるんだ。彼らのアメリカにいる平和主義者の友人は譴責されているところ